宇喜多家史談会会報
第 99 号
令和8年7月19日

宇喜多家史談会
〒七〇〇-〇八二六
岡山市北区磨屋町六―二八
光珍寺気付

邑久郷の乙子城と邑久郷城

中西 厚

乙子城は、邑久郡の沃野である千町平野の南に横たわる、邑久丘陵の南西端の小山（標高五〇m）を城地にした小規模な山城で、吉井川河口左岸を扼している。父の宇喜多興家の代に凋落した宇喜多氏を再興し、戦国大名に成り上がった宇喜多直家が、時の備前国の戦国大名浦上宗景に仕官して、城主の任に就いたとされる（『備前軍記』）小城であり、直家の国盗り物語の〝振り出し〟となった。河口の城地は、対岸の西大寺の八幡山城や金岡荘を監視する要地であり、金岡浦や名刹金陵山西大寺の河岸に、児島湾からを入港する内海航路の廻船の見張り所をなしていた。

因みに、城跡には乙子大明神が祀られている。筆者は、直家の居城とした八幡山〈金山〉城には八幡神社、亀山城跡には弁財天が祀られており、直家の居城跡と神社地の関係をすでに指摘している（会報第九五号・亀山城跡周辺の戦国時代の逸聞〈十二〉）。

吉井川河口左岸は、現在の地形が江戸時代の干拓で広々とした水田地帯となっているが、それ以前は河口に続く大きな入り江で、入り江の奥地の邑久郷が宇喜多氏の本貫地である。邑久郷の北側の邑久丘陵中程の大賀島山は直家の祖父宇喜多能家に由縁の深い地であるうえに、南側の山裾には、宇喜多氏の居城の邑久郷城があり、能家が居城していたと伝えられており、近くには菩提寺の紅岸寺が所在している。

紅岸寺には、能家が生前に肖像画を描かせて、自分の戦功と氏族の由緒を、京都南禅寺の高僧に賛として書き添えて貰った掛軸を納めていた。この寺が無住となってしまったために檀家が保存していたが、今日では国指定重要文化財となって岡山県立博物館が管理している。なお、紅岸寺には宇喜多直家の弟の忠家の画像も納められており、能家画像と同じように県立博物館で保管されている。

邑久郷の南、現在の岡山市東区西大寺一宮地区（旧邑久郡大宮村）には、延喜式名神大社（備前国の最上位の神社）の安仁神社が存在している。この神社は、社殿の構えに古式の様相が見られるが、本来の祭神が不詳となっていた。今日では祭神を五瀬命とされているが、岡山藩の神社政策によって、神武天皇東征の神話に因んで、神武天皇の兄の五瀬命に仮託されたものと、考えられている。

邑久郷と周辺の地区は、「阿仁（あに）」の名称ばかりでなく、東には大字として阿知の地名（江戸時代には下阿知村と上阿知村に二分）があり、五世紀頃の朝鮮半島からの渡来移住者との関係を伝えている。あるいは、古代の大伯（邑久）氏は、倭国の朝鮮半島諸国との交易に、深く関わっていたのかも知れない。

邑久郷の東側、下阿知・上阿知地区から東の牛窓に至る要路（現県道西大寺―牛窓線）があり、千手の峠の牛窓側には、観音菩薩の面供養や人形行列で知られる弘法寺があり、江戸時代に建てられた仁王門（岡山県指定重要文化財）が現存している。この県道は西大寺から、南回り牛窓行きのバス路線となっていた。

因みに、牛窓は瀬戸内海航路の要港で、播磨国西部の室津（港）、備前国東部の片上津、南東部の牛窓津、金岡津、南部の児島半島沿岸と廻船の経由地の一個所なっていた。これらの港は、上方と備前国南部の各地を結ぶ物流の要所として栄えていた。

余談ながら、邑久郷から東の奥地は、今日では邑久丘陵北側の千町平野の河川水利が引かれて、農業用水路も整備されているが、かつては溜池や雨水に頼っていたので、同じような地勢の牛窓側の鹿忍地区とは、水争いが絶えず起きており、宇喜多氏の先祖は、地侍として水争いの仲裁で勢力を伸ばしたとも伝えられている。